

2021年9月12日聖霊降臨後第16主日説教

イザヤ書 50 章 4-9 節
ヤコブの手紙 2 章 1-5、8-10、14-18 節
マルコによる福音書 8 章 27-38 節

東京都の緊急事態宣言が、9月30日まで延長されました。公禱の礼拝は、8月22日の臨時教会委員会の決定通り、来週19日から再開の予定です。週報にもその通り掲載しております。ただし、本日午後行われる9月の教会委員会で最終決定いたします。

なお、日曜学校ぶどうの木の礼拝は、先週からリモートで再開しております。また、今週火曜日から毎週10時に新規に聖餐式を開始、10時半から聖書を学ぶ会を再開したいと思っております。感染対策を今まで通り施しつつ、教会の活動を少しずつ再開したいと思っております。

さて、今回も「マルコによる福音書」を中心にしてお話ししたいと思います。聖書日課の福音書は、8章27～38節までですが、本来のまとまりは、9章1節までです。ここではその節も補ってお話したいと思います。

「マルコによる福音書」は、全部で16章ありますが、本日の箇所は、ほぼ真ん中ぐらいになります。ただし、単に真ん中なのではなく、内容的にも転換点として重要です。それは、「マルコによる福音書」の特徴である、「弟子の無理解」が明確になる箇所であるからです。本日の箇所から、弟子たちは物理的には一緒にいても、信仰的には、明確に離れ始めて行くのです。

お話の場面は、イエス様と弟子たちが、ガリラヤ湖北（にあったと思われる）ベトサイダから、北約40キロのフィリポ・カイサリア地方に向かう途中の出来事です。その途中、イエス様が、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と弟子たちに尋ねるところからお話が始まります（8:27）。そこでその問いに対して、弟子たちは答えます。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『預言者の一人だ』と言う人もいます」（8:28）。これらの答えはどれも間違いです。

そこで、イエス様は、「**それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。**」と尋ねるのですが、ペトロが弟子たちを代表して答えます。「**あなたは、メシアです**」（8:29）。この答えは正しいはずなのですが、お話は、「**するとイエスは、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた**」（8:30）と続きます。「戒められた」とありますが、ここは「叱る」という言葉が用いられています。ペトロと弟子たちは、正しい答えをしたはずなのだが、実は間違っていた。そこに「弟子の無理解」の重要なポイントがあります。そしてそれは、登場人物だけではなく、読者にとっても重要です。

まず、ペトロの答え「**あなたは、メシアです**」について検討してみましょう。お話は少し複雑です。この部分は、以前の口語訳では「**あなたこそキリストです**」となっていました。新共同訳からこの個所の「キリスト」は、「メシア」と訳すこととなりました。「キリスト」ではなく「メシア」という意味で

用いられていると判断したからです。そのような訳し分けがよいかどうかわかりませんが、近年では英語訳でもそのような試みが見られます。

そもそも「イエス・キリスト」の「キリスト」という言葉は、周知のとおりヘブライ語の『聖書』（旧約）にある「メシア」（油注がれた者）訳語として、ギリシア語訳聖書で用いられた言葉です。ちなみに「メシア」という音訳された言葉そのものは、新約では二か所しかありません（ヨハネ福音書 1：41、4：25）。ただし「キリスト」という言葉は、もともと「油注がれた者、油を塗られた者」という一般的な意味のギリシア語です。『聖書』（旧約）を読んだことのない人にとっては、「軟膏」か「ハーブ油」を塗られた人と思います。ただし、「マルコによる福音書」を読んでいる人が、『聖書』（旧約）を知らないとは思えませんので、この言葉は読者も登場人物のペトロと同じように、旧約で語られた「メシア」と思って間違いではありません。しかし、そのように理解した時、読者は、正しい答えをしたと思ったがゆえに、ペトロと同じように「弟子の無理解」を経験することとなります。イエス様は、メシア（キリスト）ではありますが、旧約に記されたメシア像とは異なるからです。

現代のわたしたちは、四つの福音書と他の文書によって、イエス様がどのような方であるかを知っています。しかし、「マルコによる福音書」が書かれたとき、特にそれが最初に書かれた福音書であると前提とするならば、イエス様についてのまとまった情報はありませんでした。それゆえ、十字架と復活の福音を信じて信仰に入った人でも、「キリスト」という言葉を、『聖書』（旧約）から深く学んでいたとするならば、登場人物であるペトロと同じように誤解をする可能性はあったのです。それゆえ、もし、イエス様について、ことにそのメシア性の理解が不十分であったとき、なぜペトロが厳しく誰にも言わないようにと叱られるのか、そのことに衝撃を受けたと思います。しかし、そうであるがゆえに、正しい理解へと導かれていきます。本日の箇所は、そのような機能があります。ただし、ペトロを代表とする弟子たちは、正しい理解へと導かれませんでした。そのことが続く 31 節以降ではっきりします。

31 節以降、イエス様は、「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている」と、いわゆる受難予告を語ります。それは、これからご自分が歩まれる道の先に、何があるかの予告です。それは、間接的に自分がどのようなメシア（キリスト）であるかを明確にしています。当然、それは敵対するものと闘って勝利し、イスラエルと軍事的政治的に救うメシアとは異なっています。ペトロが、イエス様をメシアと答えたのは、こちらの意味でした。

もちろん、ペトロは、イエス様がこれから誰かと闘うとは思っていなかったでしょう。しかし、イエス様は、それまでの歩みで、数多くの人の病気を癒し、悪霊を追放してきましたから、より大きな奇跡を起こしてくれると期待していたと思います。それは良い期待かもしれませんが、人間としてのペトロの考えと思いきからくる期待です。そのため、お話は、「しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた」（8：32）と続きます。「いさめはじめ」の「いさめる」は、先に「戒

め」で用いられた「叱る」という言葉です。今度は、弟子であるペトロが、先生であるイエス様を叱ったのです。それゆえ、イエス様は、「弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われます。『サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている』」(8:33)と語ります。ここでは同じ「叱る」という言葉がそのまま訳されています。ペトロを「サタン」と呼んでいますから、内容的にも非常に厳しいです。イエス様とペトロが叱り合うという、大変緊張した場面です。

この場面は、読者にとっても、非常に大きな意味を持っています。もし、読者がペトロと同じようにイエス様を理解して、イエス様に何かを期待していたとするならば、その人も、そのイエス様から「サタン」と呼ばれたともいえるからです。そして、その無理解と勘違いが、そのあとの歩みに大きく影響する可能性があることも同じです。それが、どのような事柄にかかわるのか、それが、8章24節以下に続く内容です。「それから、群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言われた」とある通り、イエス様は、弟子たちだけではなく、群衆に向けても言葉を続けます。それはその場にいるすべての登場人物たちに向けた言葉です。当然そこには読者も含まれています。

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。」(8:34-35)

このイエス様の言葉は、非常に意味が深い内容を持っています。それゆえに様々に解釈できる言葉でもあります。そして、どこに重点を置くかで、解釈も大きく変わります。その重点とは、「自分を捨てる」、「十字架を背負う」、「イエス様に従う」、「命(魂)を失う、救う」です。それらのどこに注目するかで、解釈が異なります。本日は、「命(魂)を失う、救う」とは何かということを中心に考えたいと思います。ここでの「命」は動物的命ではなく、「魂、息」を意味する言葉ですが、その言葉の選択自体には、大きな意味付けはないと思います。イエス様は、この「命」に関して、さらに詳しく語ります。「人は、たとえ全世界を手に入れても、自分の命を失ったら、何の得があろうか。自分の命を買い戻すのに、どんな代価を支払えようか」、そして補足としてさらに「神に背いたこの罪深い時代に、わたしとわたしの言葉を恥じる者は、人の子もまた、父の栄光に輝いて聖なる天使たちと共に来るときに、その者を恥じる」とまで厳しく語ります(8:35-38)。

これらのイエス様の言葉は、分かりやすいようで、分かりにくい内容です。命(魂)を失うことが救うことであり、命(魂)を救うことが失うことであると相矛盾する内容を語っているからです。しかし、もし命(魂)を失ったら、買い戻すことができないとも語っているからです。混乱してしまうのは、命(魂)という言葉が、地上の命と、永遠の命と二重の意味を持っているからです。信仰者が求めるのは、もちろん、永遠の命です。

この地上における自分の肉体的な命を失わないようにすることは、どの人間にとっても大切な事柄です。その自分の命をより豊かにすることも大切です。そのために人間は頑張るのでしょう。しかし、そこから競い合い、また奪い合

い、そして争い合ってしまうのかもしれませんが。だからこそ、そのような歩みの先にあるのは、本当に命を救うことではなく、その命が死によって奪われるという絶望しかない、イエス様はそう語っているのです。

ただし、イエス様は、今ある地上の肉体的な命を軽んじてよいということではありません。死を超えた、主なる神様が与える本当の命のことを思う時、地上において、命のために、争い合うこともない、奪い合うこともない、平和な歩みが始まる、そこに地上の命においても、本当の希望がある、そのように語っているのだと思います。

聖書日課では、省略されていますが、イエス様は、9章1節で次のように語り、教えを終えています。「はっきり言うておく。ここに一緒にいる人々の中には、神の国が力にあふれて現れるのを見るまでは、決して死なない者がいる」。新共同訳では、「決して死なない者がいる」と訳されてしまっていますが、これはすこし意識にしすぎかと思えます。原文の意味を食い取れば、「死を味合わない者がいる」です。死は人間として決してのがれることができない。それを経験しないで不老不死になるとか、そのようなことではなく、死を経験するとしても、それを死として味合わない者がいるとイエス様は語っているのです。言い換えれば、死の悲しみや恐怖は変わりませんが、その先にある永遠の命という希望があるからこそ、それらを超えることができる。そう語っているのです。

ただし、この永遠の命の希望ですら、それだけに注目するとき、戦いの動機づけに用いられる場合もあります。また、死を恐れない人の戦いは、より悲惨な戦いをもたらしてしまう場合もあります。だからこそ、わたしたちは、永遠の命がイエス様の十字架を通して示されたこと、ことにそのような苦しみや悲しみは、イエス様の出来事だけでよいと示された、主なる神様の愛があることを忘れてはなりません。

わたしたちの東京聖三一教会は、教区の中でも長い歴史を持つ教会です。それは、それだけ多くの信仰の先輩たちを、天に送っている教会であることを意味します。今年も、9月の逝去記念聖餐式は、昨年と同じく、2019年までと同じようにはできないかもしれません。それは残念な事柄ではあります。しかし、イエス様を通してわたしたちの間にもたらされた、つながりは消えることはありません。そのつながりは、肉体的な死を超えており、また時空を超えているからです。一年、あるいは二年、わたしたちの望むとおりに礼拝が行えなかったとしても、消えるものではありません。

「マルコによる福音書」という物語の中で反面教師である弟子たちは、逮捕されたイエス様を見て、逃げ去りました。そして、深い失望と後悔で過ごしていたと思います。そのような弟子たちを、復活したイエス様はもう一度招かれました。だから、今も教会があり、また常に希望があります。わたしたちの教会もその一つです。東京教区の中で、少し先輩の教会として、これからもその希望を強く持ち続けながら歩み続けたいと思います。